

歴史的眞実と眞実

きたおかしんいち
北岡伸一

国連日本政府代表部特命全権大使

『ク・タイムズ』紙の批評は辛口だった。前回は、日本人の歌手、日本語の歌詞で、字幕つきだったが、そのほうがよかったという。日本人によるミュージカルという形容詞をかぶせて、一種のオリエンタリズムを残しておきたいということだろうか。

ミュージカルは、ペリー来航を

ス

ティーン・ソンドハイムのミュージカル「太平洋序曲」が、宮本重門氏の演出で、ブロードウェイで上演されている。初演は1976年、宮本氏が日本で演出し、それをリカンセンセターで上演して大きな成功を収めたのが2002年だった。これを、本格的なブロードウェイ・ミュージカルとして上演するという画期的な試みである。

る。

しかし、今回の『ニューヨー

テーマにしたもので、独自の文化をもつていた日本が、西洋の支配する国際社会に入るために苦労を重ね、そのために、西洋に評価されるような強国へと自己変容を遂げていく、というのがあらずじである。

日本政治外交史は、私の専門分野であるが、日本の開国と近代化という複雑な事件を、短時間のうちに圧縮して、自由に描きなおした手腕には感心させられた。老中の阿部正弘と堀田正睦と井伊直弼が同じ人物となり、ジョン万次郎は幕府の変容に怒って攘夷派になるなどというのは、面白い。歴史的事実を踏まえつつ、「演劇的眞実」に到達しているといつてよいかもしれない。

後日、演劇マニアの安藤裕康ニューヨーク総領事に招かれ、宮本氏と話し込む機会があった。主演（語り手）のB・D・ウォンは、中国系アメリカ人で、すごい葛藤があつたのだという。ソンドハイムのミュージカルの主役などは、一生に一度のことかもしれない、絶対この役はやりたい。しかし、120%アメリカ人となりきっている彼にとつて、アジアの視点に立つことは、実はすごく難しいことだった。しかも、彼の役は、近代化の結果として中国を侵略した日本人だつたのだから。

あるとき、ウォンがのどを痛めてフィリピン系の歌手に代わつたら、それが大人気だったという。彼には、そうした葛藤がなく、ストリートに役に入り込めたからだという。そのあたりを、新聞批評は鋭く突いていたのかもしれない。国連の場で仕事をしていると、日本のごうした後発国経験は、とても貴重だと思う。世界の多くの国々が、日本に好意をもつてくれるのは、まさにこの点にあることは間違いない。できるだけ多くの途上国の人にも観てほしいと思う。